

こんにちは！歴史資料室の鈴木です。だいぶ涼しくなりましたね。

今夏は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、各種行事やイベントの中止が続き、あまり夏を味わえないまま秋が来たように感じます。とくに青森ねぶた祭りが開催できなかったことは本当に残念でした。

ねぶたといえば、私は少し前から堤橋のデザインが気になっていました。橋の親柱と高欄にねぶたのモチーフがあしらわれるなど、青森らしい特徴あるデザインになっています。どなたの作品なのか気になっていましたら、先日、昭和59年（1984）3月28日付『東奥日報』に「新堤橋に粋な装飾」という記事を見つけ、一級建築士で彫刻家の齋藤賢侔^{けんきち}（1902-1992）が手掛けたことを知りました。

記事によれば、親柱の台座は青森県の形になっており、上のU字型に開いた部分が陸奥湾を表しています。台座の上には、女性と子どものハネト姿の透かし彫りブロンズが2枚1組で置かれ、さらにねぶたの太鼓、波、青森市の花ハマナスといった青森を象徴するモチーフがあしらわれています。



親柱

高欄には、ねぶた、ハネト、金魚ねぶたがデザインされた透かし彫りの装飾スクリーンが4枚1組で計16枚取り付けられ、これに朝日や夕日が射すと、橋や川面にシルエットができる仕掛けになっているそうです。



高欄に取り付けられた透かし彫り

制作者の齋藤は、明治35年（1902）に尾上町（現平川市）に生まれ、大正6年（1917）に青森県立工業学校（現青森県立弘前工業高校）木工科を卒業しました。

彫刻家を目指し、昭和3年頃に青森市で彫塑会という団体を立ち上げ、弘前から彫刻家の工藤繁造を招いて木彫を学びました。やがて、昭和7年の東奥美術展で特選に入り、日本美術院試作展でも入選するなど、戦前期の青森県美術界で成績を残すようになりました。さらに、昭和14年に古藤正雄（平和公園の「平和の乙女の像」「天宇受売命之像」の制作者）らと塊友社を結成、また平櫛田中にも師事して勉強しました。

戦後は、彫刻を続けながら一級建築士となり、県内の建物の設計に関わりました。『あすなる随談—わが道 わがこころ』（1984年 東奥日報社）によれば、戦災で焼失した県庁の復興をはじめ、岩木山神社山頂の本殿、善知鳥神社本殿、広田神社、深浦町の神明宮、田名部神社、蓮心寺、光明寺、棟方志功記念館、ほかには沖縄県に建立された本県の南方戦没者のための慰霊碑「みちのくの塔」など多くの建築物を手掛けています。

また、青森県文化振興会議の発足にも尽力し、昭和35年から現在まで続く青森県美術展（県展）の発足・運営にも深く関わるなど、戦後の青森県の建築界のみならず美術界にも功績があったことから、昭和57年度の第24回青森県文化賞を受賞しています。

堤橋を渡る機会があれば、ぜひこの装飾を見てみてくださいね！